

英國における姉妹都市提携と地方団体

(財) 自治体国際化協会 CLAIR REPORT NUMBER 049 (JUN.10,1992)

はじめに

第一章 英国における姉妹都市提携

第二章 提携後の活動

- 1 地方団体の代表者、専門家による交流
- 2 広範な改装による社会、文化、スポーツ交流
- 3 産業振興、経済発展のための交流
- 4 開発途上国、東ヨーロッパ諸国等との技術交流、技術援助

第三章 姉妹交流協会とボランティアグループ

第四章 地方団体とのかかわり

第五章 姉妹提携支援の仕組み

- 1 旅行費用と保険の割引き
- 2 姉妹都市優秀賞の制定
- 3 姉妹都市にかかる情報提供、セミナーの開催

おわりに

財団法人 自治体国際化協会
(ロンドン事務所)

目 次

はじめに	1
第一章 英国における姉妹都市提携	2
第二章 提携後の活動	5
1 地方団体の代表者、専門家による交流	5
2 広範な階層による社会、文化、スポーツ交流	7
3 産業振興、経済発展のための交流	10
4 開発途上国、東ヨーロッパ諸国等との技術交流、技術援助	12
第三章 姉妹交流協会とボランティアグループ	14
第四章 地方団体とのかかわり	16
第五章 姉妹提携支援の仕組み	18
1 旅行費用と保険の割引き	18
2 姉妹都市優秀賞の制定	19
3 姉妹提携にかかる情報提供、セミナーの開催	19
おわりに	21

はじめに

姉妹都市を意味する言葉は、国によってさまざまである。アメリカ合衆国では、文字どおりシスターシティという言葉が使われている。ドイツではパルトナーシャフト（パートナー）、フランスではジムラージ（対）、そしてイギリスでは、ツイニング（双子）と称される。

ヨーロッパ各国は、姉妹都市提携について長い歴史をもち、その活動はきわめて盛んである。とりわけ、ボランティアグループを中心とした市民レベルの活動には目をみはるものがある。以下、英国における国際交流、とくに姉妹提携の実態を紹介しながら、ボランティアグループの活動と地方団体の役割についてみてみたい。

第一章　英國における姉妹都市提携

英國における姉妹都市は、1921年、ランカシャー県ブラックバーンとフランスのペローヌが提携したのが最初である。その契機となったのは、1914年からヨーロッパの各地を戦場と化した第一次世界大戦で、有数の激戦地となったフランス、ソンム川の攻防戦であった。4か月半におよんだこの戦闘には、ブラックバーン出身の兵士が大勢参加し、当時のブラックバーン市長の子息をはじめ、たくさんの犠牲者をだした。

こうした事から、戦後、ソンム川にかかる橋の再建が計画されたとき、ブラックバーンよりその建設資金が提供された。両市の懸け橋ともなったこの橋は、名称も「ブラックバーンの橋（Le Ponto De Blackburn）」と命名された。これをきっかけに、1921年、ソンム川ぞいの小さな町であるペローヌとブラックバーンとの姉妹都市がスタートすることになった。

その後、姉妹都市提携を行う地方団体は年々増加したが、第二次世界大戦以降急速な増加をみせ、最近数年間は、毎年50組以上の提携が行なわれている。1991年2月現在の提携数は、別表にみると、52か国 1,530組に上っている。相手国では日本の1.2倍、提携数では約2倍にあたるが、イギリスの地方団体数は日本の6分の1程度にすぎず、一団体あたりの平均提携数が2.5組にもなっていることから、その活発さを伺い知ることができる。

相手国では、欧州各国が大半で、特にフランスとドイツの両国で全体の74パーセントを占める。その理由をたずねたところ、地理的、歴史的つながりに加えて、英国人が最も身近に感じている外国語であるフランス語とドイツ語の習得に役立つからという、きわめて現実的なものであった。

こうした英國とヨーロッパ大陸諸都市との網の目のようなネットワークは、ヨーロッパ大陸内の各都市間でも同様に行なわれている。フランスを例にとれば、仏・独間の提携は、英・仏間の二倍以上にあたる 1,599件、仏・伊間は 284件、仏・ベルギー間は 257件となっている。この結果、英國と姉妹提携を行なっている相手都市同士が、相互に姉妹提携を行い、三都市による姉妹都市提携になっている例も少なくない。

例えば、冒頭に述べたブラックバーンと仏のペローヌ（Peronne）と独のアルテナ（Altena）、ニューベリー（Newbury バークシャー県）と仏のバグノル・スー・セーズ（Bagnols Sur Ceze）と独のブラウンフェルズ（Braunfels）、ルートン（Luton ベッドフォードシャー県）と仏のブルガーン・ジャル（Bourgoign Jalliau）と独のベルギッシュ・グラッドバッハ（Bergisch Gladbach）などである。

これらの都市は、提携後の活動についても、三都市共同で行なうことが少くない。ブラックバーンでは、1990年以降毎年、三都市持ち回りで、青年ジャンボリーを開催したり、1989年以降、若手技術者や労働者の相互交流プログラムを実施したりしている。勿論、外国語の習得などを目的とする学校交流や、サッカーをはじめとするスポーツ交流も頻繁に

行われている。

アメリカ合衆国、カナダとの交流については、日本とアメリカ合衆国、カナダとの交流の3分の1程度で、あまり活発ではない。その他、日本とはほとんど行われていないアフリカ諸国、東欧諸国とも、数は多くないものの提携が行われていること、南米諸国とはほとんど交流がないことも一つの特色にあげられる。

日本との交流は、わずか3件にすぎず、日本とフランス、日本とドイツなどとの交流に比べて極めて限られたものとなっている。この理由を何人かの地方団体関係者に確認したところ、距離の遠いことに加えて、言葉の障害、財政上の問題などが大きな障害になっているとのことであった。確かに、極東に位置する日本との交流は、地理的にも資金的にも大きな制約があるといえよう。

英国の相手国別姉妹都市提携数

大陸	国名	英國の提携数	日本の提携数	
		(1991年2月)	(1991年8月)	
ヨーロッパ	フランス	699	30	
	ドイツ	436	25	
	オランダ	44	7	
	ベルギー	23	4	
	イタリア	23	15	
	旧ソ連	30	27	
	デンマーク	13	1	
	イギリス	—	3	
北米	アメリカ	72	270	
	カナダ	12	47	
アジア	中国	25	133	
	韓国	—	38	
	日本	3	—	
大洋州	オーストラリア	15	50	
	ニュージーランド	10	19	
その他		125	163	
	うち ユーゴスラビア	10	うち ブラジル	57
	ノルウェー	12	フィリピン	18
	アフリカ諸国	22	メキシコ	7
合計		1,530	847	

1 Local Government International Bureau 「List Of Twinning」

2 日本の国際姉妹都市一覧1991 国際親善都市連盟

第二章 提携後の活動

姉妹都市提携後の活動については、イギリスと日本との間で大きな違いはないようである。全体的な特徴としては、活動の種類が多彩であり、参加者は年齢、職業を問わず大きな拡がりを持っていること、活動の多くがボランティア・グループによって支えられていること、イギリスの厳しい経済、雇用状況から、地域振興を目的とした経済交流が顕著になっていることがあげられる。

また近年、地方団体が中心となって、アフリカ諸国をはじめとする開発途上国や東ヨーロッパ諸国へ、さかんに技術援助・指導がおこなわれているのも、あたらしい動きとして注目される。以下、さまざまな活動について、その分野ごとに具体的な事例を紹介していきたい。

1 地方団体の代表者、専門家による交流

「5都市間ゴミ処理問題研究会」

ロンドン33区のひとつであるサットン区は、1988年春、ゴミ処理問題について、提携先のヨーロッパ4都市と合同研究会をもつた。

サットン区の姉妹提携先であるデンマーク、ドイツ（2都市）及びオランダの4都市からは、ゴミ処理問題の専門家が参加した。彼等は、ユナイテッド・ガラス会社のハーロー工場で、リサイクルについてのフォーラムに出席したのをはじめ、サットン区が準備した1週間のプログラムに参加した。

リサイクル工場では、会社から説明を受けた後、ガラス製造とリサイクルプロセスについてのビデオを見た。さらに、工場のリサイクルプラントとガラス製造工場を実際に視察したが、参加者はいずれも、工場で採用されている近代的生産技術や効率の良さに感銘を受けた。

同工場は、ヨーロッパで最も近代的なガラス・リサイクルプラントのひとつであるが、この会議で得られた結論は、もしヨーロッパ大陸諸国なみのリサイクル水準に達しようすれば、英国のどこも、非常な努力を必要とするということであった。

会社は、メンバーの訪問に備えて、各都市のリサイクルに関する統計表を作成したが、サットン区の数値は、他都市よりはるかに遅れたものであった。例えば1987年には、サットン区は、平均して21,200人にひとつの割合でしかボトルバンク（リサイクル促進のため、道路脇や空き地などに置かれ、市民が不用となったビンやカンを隨時投げ込むことができる

る大きな容器)がなく、リサイクル率は、わずか4パーセントと推定された。対照的に、ドイツのミンデンでは、ガラスは40パーセントのリサイクル率となっており、平均1,067人にひとつの割合でボトルバンク(全市で75)が置かれている。

これは、1987年の結果であったが、この年ミンデンでは、ボトルバンクから1,541トンのガラスを回収したのに対し、サットンでは、わずか209トンにすぎなかった。デンマークのグラドサクスは、大陸4都市中、最低であったが、それでも314トンを集め、リサイクル率は10パーセントであった。とくに注目されたのは、デンマークでは、ビールやジュース類のパックのうち、返還できないものの販売を禁止していることであった。

サットン区の係官は、リサイクル率を高める鍵は、より多くのボトルバンクを設置することであるとコメントしている。サットン区の数字は、英國全部にあてはまり、総人口5,500万人にたいして、全国でわずか3,100のボトルバンクしかない。したがって、人々がボトルバンクに行こうとしても、きわめて不便な状況である。

リサイクル担当大臣は、1991年までに、人口1万人あたり1つのボトルバンクを置くことを目標に、あらたに少くとも5,000個のボトルバンクを設置することをめざしている。

リサイクルに関する今回のフォーラムは、ロンドン区の1つが、ヨーロッパの諸都市と意見交換を行う大変よい機会となった。また、ゴミ問題を解決するためには、国際的視野にもとづいた、ガラスリサイクルの考え方方が不可欠であることが明らかになった。

「スコットランド・バイエルン州姉妹都市会議」

1988年10月、スコットランドとドイツ・バイエルン州から、100人以上の姉妹提携関係者が集まり、第4回スコットランド・バイエルン州姉妹都市会議を開催した。参加者は、バイエルン州の15地方団体とスコットランドの地方団体・姉妹交流協会の代表であった。

会議は、両地方の姉妹提携とともにさまざまな問題を議論することであったが、とくに、つぎの三点が中心となった。すなわち、提携とともに交通の問題、特別な目的を持ったグループのための提携の仕方、姉妹提携に関するPRの方法の3つであった。

代表者は、全員議論に加わり、将来の行動にむけての種々の提案がなされた。最終的には、両地方の姉妹提携を改善し、強化するために19の提案がなされた。この中には、体の不自由な人たちが利用できるホテルやレストランの登録制度を導入することや、経済交流の促進によって、多くの市民を交流活動に参加させること、といった提案もある。これらの提案を実際の行動に移すべく、具体的な施策を検討するため、今後1年から1年半にわたって、定期的に打ち合わせの機会をもつことが計画されている。

会議は、10月20日から25日にかけて、ダンディとグラスゴーの2つの都市で行われた。いずれの会議も、両市のほか、スコットランド地方団体連合とブリティッシュ・カウンスルによって主催されたものである。バイエルン州からの参加者は、週末をそれぞれ、提携

先のパートナーと一緒にすごし、スコットランドのアトラクションや施設を十分楽しむことができた。とくに、ダンディ港にとめられているユニコーン号は、参加者の興味をひいた。この船は、1824年に完成した帆船フリゲート艦で、英国で建造されたものでは現存する最古のものである。ドイツからの参加者は、会議における成果とあわせて、英國で最も美しいといわれる風景に大きな感銘をうけて帰国した。

2 広範な階層による社会、文化、スポーツ交流

「スポーツ提携1988」

ロンドン南部、ウェストサセ克斯県のチチェスターとフランスのシャトレーの提携は、1959年までさかのぼる。1974年の地方団体統廃合で、チチェスターはパリッシュカウンシル（第三層の地方団体、概ね教会区を単位とする）となり、その権限や財政力はきわめて限られたものとなった。このため、交流活動は停滞したが、最近になって、ディストリクト（日本の市町村に相当）からの資金援助も増え、活動も活発になっている。

「スポーツ提携1988」となづけられたこのイベントは、姉妹提携の楽しさを若者にもわかつてもらおうと計画されたものである。過去には、たくさんのスポーツ交流がおこなわれたが、時期がまちまちであったことから、今回は、同じ時期に、できる限り多くの競技が行われるように計画された。

シャトレーの参加者は、金曜日の夜、フェリーでドーバー海峡を渡り、ニュー・ヘブン（ロンドン南部の港町）を経て、土曜日の早朝チチェスターに到着した。スケジュールは、土曜日、日曜日の2日間を交流試合にあて、月曜日（この日はフランスの祝日にあたっていた）の早朝、帰国の途上につくというハードなものであった。大変厳しい日程にもかかわらず、このスケジュールに従えば、仕事を休まずにすむことから、たくさんの人々の参加が可能になった。

<パラシューティング>

週末の一番の呼び物は、飛行機から地上の小さな円盤をめざして飛び下り、目標との至近さを争うパラシューティングであった。これは、チチェスター劇場に隣接するオークランド公園で行われた。

この競技は、模範競技で行われたときよりずっと早いスピードで、直径5センチメートルのディスクにめがけて着地するため、競技者のショックをやわらげる良質の砂利の小山が必要であった。この点も、地元のスカイダイビングクラブの協力で、立派に準備が整え

られた。当日は、天候にも恵まれ、照り輝く太陽を背に、50回以上のジャンプが行われた。隣接する劇場で、演劇を楽しんでいた観客も、思いがけずパラシューティングを見る事ができた。結果は、フランスチームの勝利に終わったが、チチェスターの飛行クラブのメンバーは、1988年暮れにシャトレーを返礼訪問した。

<マラソン・リレー>

シャトレーからチチェスターまで、警察官と消防士が協力して走り通したマラソンリレーは、姉妹提携を象徴するイベントであった。メンバーは、金曜日の早朝、シャトレー市長の見送りをうけたあと地元を出発し、リレーをくりかえしながら、ドゥエッペ（ドーバー海峡に面する仏の港町）まで走り、さらにニューヘブンを経て、土曜日の午後、チチェスターに到達した。（前年は、ドイツの姉妹都市との間で、同様なマラソンリレーを行っている。）

<メイジョリット>

フェスティバルの盛り上げに貢献したのは、20人のスマートな若い女性による“シャトレーメイジョリット”であった。彼女らは、土曜日の午後、歩行者専用区域で規律のゆきとどいた行進を披露し、日曜日には地元のバトントワラーにも参加した。

<自家用飛行機>

すばらしい天候の中、シャトレー飛行クラブから、3機の自家用飛行機がチチェスターを訪れた。

<柔道>

地元柔道クラブは、ウェストゲイトセンターのメインホールで、シャトレーの柔道クラブと試合を行った。

<ホッケー>

ジュニアチームとシニアチームの2つのホッケークラブの試合も、大成功をおさめた。シニアチームのメンバーは、相手チームの家庭にホームステイしたが、ジュニアチームのメンバーは、大学でテントをはつた。この点は、大学内で試合が行われたことから、大変便利であった。試合の結果は、チチェスターが勝利をおさめた。

<サッカー>

試合は、両市の病院に所属するサッカーチームの間で行われた。サッカーは、はじめて行われた競技であったが、今後シャトレーと提携している他の2つの姉妹都市も参加して、“4都市対抗サッカー大会”を実施する計画である。

<熟年者交流>

多くの姉妹都市と同様に、チチェスターとシャトレーは、毎年、交互に訪問しあっている年配者の市民グループを持っている。「スポーツ提携1988」の期間中には、シャトレーから50人以上の熟年者が、チチェスターを訪問した。5月22日の日曜日には、公園でボーリング、水泳、スクウォシュ、ジョギング、卓球など様々なレクリエーションが催され、大勢が参加した。熟年者交流は、国会見学も含めて水曜日までおこなわれた。

「スポーツ提携1988」をしめくくる意味で、レジャーセンター大ホールで、レセプションが行われた。参加者は、400人以上にのぼり、市長や議長から歓迎を受けた。市長の挨拶、シャトレー市長によるお礼の言葉に続いて、記念品交換やトロフィー授与が行われた。さらに、立食式の食事、若い人達に人気をよんだカフェテリヤでのディスコと続いた。

参加者は、2日間という短い期間であったが、それぞれの活動の記憶を胸に、翌朝早くフランスへ向けて出発した。

「姉妹提携10周年記念行事」

1988年は、ロンドン北東ノーフォーク県のノーリッジとドイツのコブレンツの姉妹提携10周年に当たり、さまざまな行事が行われた。

まず1988年3月には、コブレンツから、5人の市民代表がノーリッジを訪問した。これは、10年前の同じ日に、姉妹提携の調印式が行われたのを記念するためであった。

6月初めには、コブレンツの友情協会のメンバーが、ノーリッジ友情協会の来客として、バスで訪問した。さらに、コブレンツからノーリッジまで、22人の走者によるマラソンリレーや50人におよぶコブレンツ・キリスト教民主同盟のメンバーによるノーリッジ訪問が実行された。とくに、マラソンリレーは、コブレンツからドイツ、ベルギーをへてフェリーでドーバー海峡を渡り、さらにノーリッジまで走り通すもので、市民の関心をよんだ。途中の連絡は、定期的にアマチュア無線家たちが行った。彼等は、おもに各家庭に滞在し、準備されたさまざまなプログラムを楽しんだ。

9月26日から10月1日までは、コブレンツで10周年記念展が開催された。両市の写真クラブ主催の写真展、ノーリッジの特産品展、姉妹提携記録展などがおこなわれ、大勢の市民が訪れた。

3 産業振興、経済発展のための交流

この分野は、近年とくに活発になってきているが、大きく分けて、技術者、職人、農業者など専門分野ごとの交流と、物産展、フェスティバルの開催の二種類がある。

「技術者交流」

ウェールズ地方に接するグロスター・シャー県のサイレンスターは、提携先であるドイツのイツホーと、継続的に職人や技術者の相互交流を行っている。

最近の例では、サイレンスターから、若手パン職人がイツホーのパン屋に2週間、造園技師がイツホーの地方団体に2か月間、それぞれ滞在し、ドイツのパンづくりや造園技術を学んできた。一方、イツホーからは、自動車整備の技師が、2か月間コツウォルド地方の自動車整備工場で訓練を受けた。

いずれも、専門分野の知識、技術の習得はもちろん、仕事仲間や友人づくり、海外での生活の仕方、考え方の違いの理解など大きな収穫を得て帰国した。

「ストラスブルグとアルサス地方観光物産展」

1988年9月26日から6日間、イングランド中部レスター・シャー県のレスターにおいて開かれたこの観光物産展の目的は、レスターの提携先であるフランスのストラスブルグの様子を市民に知らせ、ストラスブルグがどんな町かを市民に理解してもらう事であった。とりわけ、ストラスブルグの特産品販売に重点が置かれた。

フランスからは、ホテル関係の指導教官、12人の学生シェフをはじめ、およそ70人がレスターを訪れた。おもな参加者は、市長、市会議員、商工会議所の代表、2つのバンドグループ、フォークダンスグループ、パントマイム芸術家などであった。

イベントの1日目は、レスター市役所およびストラスブルグとレスターの商工会議所関係者の出席のもと、ビジネスセミナーが開かれた。セミナーには、地元のビジネスマンが多数参加し、活発な質疑がおこなわれた。夕方には、イベントの関係者全員を対象に、盛大なレセプションが開かれた。

2日目は、ストラスブルグ市長ら代表団一行は、地元新聞社の見学ツアーに参加した後、レスター市長主催によるパーティに出席した。120人程が出席したこのパーティの料理は、すべてストラスブルグ料理学校（Catering College）の学生によって準備がなされた。全部で10種類に及んだアルサス特別料理のコースは、専門家のものと見間違う程の出来栄

えであった。会場となった市役所は、フランスの三色旗と E C 旗できらびやかに飾られ、参加者は、ダンス、軽音楽などを楽しんだ。

3日目には、市民グループの代表は、レスターの市民センターで行われた多くのイベント（最近にいたるまでの博物館ポスターの展示会、商店の飾り付けコンテスト）を見学した。市場関係者は、中央広場で、アルサス地方の特産品即売会を行った。広場では、アルサス地方伝統のフォークダンスも行われた。一行は、大変な人気を博しているストラスブルグの著名なパントマイム劇も見学した。さらに、レスターに本拠を置く会社のデザインによる、ドーバー海峡トンネル用高速列車の模型を視察した。この模型は、フランスからの訪問者に大変な関心を引き起こした。引き続き、さようならランチをとり、両市の強い友情と一層の発展を誓いあつた。

特産品の販売は、残りの期間も続けられ、多くの市民をひきつけた。アルサスのレストランは、昼食時には一般市民に、夕食時には関係者に、大変好評を博した。市役所前広場では、アルサス地方にかんする旅行情報の提供も行われた。

4日目は、あらたに、アルサス地方特産品の卸売りが行われた。夕方には、ストラスブルグ市役所の3人の幹部がレスター市の議会に出席し、公式に歓迎を受けた。

行事は土曜日まで続き、大部分のグループは、大成功をおさめた成果を胸に、日曜日の早朝、ストラスブルグへむけて帰国の途についた。

「ルイシャム・フランス祭り」

1991年11月、ロンドン区の1つであるルイシャムで、フランスのアントニーとの姉妹提携を祝う“ルイシャム・フランス祭り”が2週間にわたって行なわれた。

ルイシャムの中心商店街を主要会場に、市長、アントニーからの使節団、地元小学生のバンドなどが参加した開会式に続いて、種々の催しが繰り広げられた。姉妹提携の実態を紹介する展覧会、両市の職人が参加した工芸品展、アントニーの料理学校生徒によるクレープの作り方実演会、地元小中学生による“フランスの歌と音楽のタベ”、アントニーのジャズバンドとルイシャムのコンサートバンドによる演奏会など、いずれも市民の好評を博した。

また、ルイシャム図書館では、フランスの本、新聞の展覧会、フランス映画の上映、ヨーロッパに関するクイズ大会、フランスの音楽やフランス料理の実演、さらにフランスから到着したばかりのワインを楽しむボジョレヌーボのタベなど、盛り沢山なイベントが行われた。

中心街にある商店街も、この催しに協賛して、店内を両国国旗で飾ったり、ショーウィンドーに祭りのポスターを掲示して協力した。ルイシャムで、こうしたイベントを実施したのは初めての試みであったが、地元商店街やボランティアグループの協力をえて、大成

功のうちに終了した。

4 開発途上国、東ヨーロッパ諸国等との技術交流、技術援助

「ベビーフードと注射器の緊急援助」

ロンドン北部ハートフォードシャー県のワトフォードは、提携先である旧ソ連のノブゴロードの病院・医院へ、不足が深刻化しているベビーフードやプラスティック注射器を送った。

“ノブゴロードの赤ちゃんを救おう”と名づけられたこの運動は、地元新聞社の協力のもと、市民に寄付をよびかけ、市当局がベビーフードを大量に購入し、ノブゴロードへ送ろうというものであった。この呼び掛けは、プラスティック注射器の会社にもなされた。1990年夏、ノブゴロードを訪れたことのある市議会のリーダーは、こうして送られる食料や注射器は、たくさんの赤ちゃんの命を救うことになろうと述べた。

運動は、市民の共感を呼び、相当な寄付金を集めることができた。注射器会社も、何箱かの寄付を申出、ベビーフード会社とともに、原価で提供をした。これらの品々は、ロンドンにある旧ソ連大使館の協力のもと、エアフロート航空会社によって現地まで運ばれた。

こうした支援活動は、在英・旧ソ連大使館からの要望をうけて、英國国際地方自治協会（Local Government International Bureau）が、英国内の自治体に行った要請に応えて行われたもので、他の地方団体でも始められている。

「南アフリカ連邦の民主的な地方自治の育成」

アパルトヘイト政策の廃止にともない、民主的な地方団体への移行を円滑に行うため、アフリカ民族会議（African National Congress）との協議のもと、南アフリカ上級教育プログラムが開始された。その目的は、南アフリカの黒人たちに地方自治の研修を行い、黒人の管理職を養成することであった。とくに、将来の地方自治制度導入にそなえて、地方行政の理論と実際の両面を研修することに重点が置かれた。計画は、アパルトヘイトにかわるものとして、多くの地域で作られている黒人グループの地域組織である市民連合の資金を活用することになった。

研修生の第一陣は、ボンベイの全インド地方自治研究所で入門コースを終えた後、1991

年4月30日、英国に到着した。ロンドンでの滞在は6日間であったが、この間、先進的事業の計画や組織に密接に関わっているNALGO（National Association Of Local Goverment Officer）やロンドン区の一つであるイズリントン区役所を訪問した。

実際の研修は、バーミンガム大学の地方自治研究所開発行政グループによる短期コースから始まった。その後、研修生は小グループに分かれ、イングランド北部の地方団体で8か月間の実地研修を行った。

こうした研修プログラムは、将来も計画されている。現在のコースを担当している地方団体は、この研修に重要な役割を果たしているが、それ以外の地方団体でも、今後アフリカからの研修生を支援する意向を明らかにしている。

第三章　姉妹交流協会とボランティアグループ

このような活発な交流活動を支えているのはだれであろうか。この点については、姉妹提携関係が成立するまでは、行政側が中心となることが多いが、その後は、自治体と国際交流に関心をもつ個人、地元のボランティアグループなどで構成される姉妹交流協会（T-winning Association、姉妹交流委員会—Twinning Committeeと称している所もある）が中心となっているところが多い。また、規模の小さい自治体では、すべてボランティアに任せ、自治体がほとんど関わっていないところも少なくない。

姉妹交流協会は、そのトップに、地方団体の市長、議長がなることが多く、事務所も役所の中に置かれることが多い。また、地方団体の職員が協会のメンバーとなり、事務局を引き受けている所もみうけられる。規模の大きな市では、地方団体が中心となって市全体を網羅する姉妹交流委員会を作り、さらに市内各地区ごとに姉妹交流協会を設け、相互に協力、分担しながら、活動を行っているところがある。

姉妹交流協会のメンバーとなっているグループ、組織は、相当広範囲にわたっている。例えば、中規模の都市でも、文化、スポーツ、趣味、奉仕活動など社会活動を主とするグループ、専門的、技術的活動を主とするグループ、学校や大学関係のグループ、ロータリークラブやライオンズクラブ、商工会議所、商店街、企業、マスコミ関係など250前後に達するという。活発な活動を行っている協会では、毎年一回の総会のほか、毎月会合を持っている所が多い。

姉妹交流協会の抱える課題で最も大きなものは、財政問題である。後述するように、地方団体から若干の補助金を受けているところも、そうでないところもあるが、いずれも、資金確保に大変苦労している。このため、民間企業に寄付をあおいだり、種々のイベントなどを開催して、費用をまかなっているところが少なくない。

ボランティアグループに関しては、英国では、姉妹提携に限らず、福祉、環境保全、教育、文化、スポーツなど広範な活動が、さまざまなボランティアグループによって支えられている。

こうしたボランティアグループの実態を把握するのは、容易ではないが、ボランタリーグループ全国会議（National Council For Voluntary Organization）によれば、所得税、地方税、VAT（付加価値税）など税金控除が受けられる慈善団体として登録されたものだけでも、イングランド、ウェールズで168,000団体にのぼる。慈善団体として登録されていないグループを含めると、ボランティアグループの総数は、約25万団体に達する。さらに、毎年約4,000団体が、新たに慈善団体として登録されている。

ボランティアグループで働いている常勤職員は、約25万人、団体の年間収入は、GNPの4%にもなっている。そして推定ではあるが、イギリス人の少くとも3人に1人は、毎月一つ以上、何らかのボランティア活動に参加しているといわれている。

以下、前述のチチェスター・シャトレー両市対抗スポーツ大会を例に、ボランティアグループの活動をみてみたい。

大会の準備に要した期間は、各スポーツクラブが、通常かなり先までのスケジュールを決定していることから、2年余りを必要とした。この間、スケジュールの確定、宿泊先の確保など、相互に頻繁な連絡を取りあつた。

特に問題となる宿泊については、試合の相手チームが、お互い責任を持ってホームステイ先を確保する方式が取られた。大部分は、この方式で成功したが、メイジョリットのように相手チームのないグループの宿泊は、当初は困難であった。しかし、地元新聞の協力を得て市民に訴えた結果、全員のホームステイ先を確保することができた。

大会の準備組織（6チームで編成）

- 全体事務局班—大会全体の調整と市当局との連絡
- スポーツ班—スポーツ全体の計画と各クラブとの調整
- 広報班—大会パンフレット、プログラムの作成、入場切符の手配
- 宿泊班—参加者全員の宿泊と食事の手配
- レセプション班—しめくくりのパーティの開催と大会の記録
- レジャーセンター班—主会場となったレジャーセンターの運営

各班のスタッフは、すべてボランティアであったが、いずれの班も、専門的知識を生かしながら、全力を挙げて取り組んだ。各班の間の連携もよく、大会は成功裡に終了した。支出した経費は、スポーツ施設の借り上げと歓迎レセプションの開催など 3,000ポンド（約70万円）であったが、ディストリクトとパリシュからの補助金でまかなわれた。

第四章 地方団体とのかかわり

各地方団体の姉妹提携に対する考え方はさまざまであるが、全英姉妹提携委員会(Joint Twinning Committee of Local Authorities of Great Britain and Northern Ireland)によれば、地方団体は姉妹提携について、特に以下の4点に中心的な役割を果たす必要があると強調している。

- 1) 最初の交流関係を作りあげると共に、その後の公的な接触、交流を維持していくこと。
- 2) 地方行政や行政サービスに関する情報を交換したり、専門家同士の交流、共同調査を実施すること。
- 3) 提携先についての情報を保持し、その更新を行うこと。
- 4) ボランティアグループやさまざまな組織が交流を行うに当たって、自ら計画し、資金調達を行い、実施できるよう側面から手助けすること。この場合、専門的アドバイスやグループ間の調整を行えるよう、地方団体内の責任者を決めておく事が重要である。

これらの点について実情を調査するため、ドイツ、ベルギー、旧ソ連、ジンバブエの4都市と姉妹提携しているノッティンガムシャー県のノッティンガムを訪ねてみた。30代後半で、話し振りにも自信が溢れ、いかにもベテラン職員といったC氏は、重厚な雰囲気を残す市役所内の一室で、姉妹提携に関する仕事の取組み方などを大変率直に語ってくれた。

「姉妹提携を担当しているのは、私一人です。仕事量も、姉妹提携に関する部分は週一回程度で、割合でいければ1～2割に過ぎません。

つまり、一旦提携関係が作られれば、各グループは、独自に相手グループと接触し、交流を行っていきますので、この程度の関わり方でいいんですよ。地方団体は、最初に提携関係を作り上げる事と、情報センター(A Clearing House for Information)としての役割が主なものでしょう。もちろん、何か大きなイベントがあるときは、私たちもできる限り応援し、渉外担当(Public Relations Section)や情報サービス担当(Information Section)の協力をあおいだりはしますが。」

ノッティンガムの場合、後述するように、姉妹交流にかなりの補助金を出しているにもかかわらず、この程度のかかわりしか持っていない。いずれにしても、地方団体の姉妹交流における役割は、交流の基礎づくりが成された後は、関係団体やグループへの情報提供、専門的アドバイスなど側面的援助が中心となっており、姉妹交流の主体は、ボランティアグループが担っているといえよう。

地方団体の役割として、今一つ財政援助がある。この点は、英國の地方団体はあまり財政的に豊かでない上、その支出に厳しい制約があることから、かなり限られたものとなっ

ている。規模の大きな市で、特に地域振興を目的とする場合には、かなりの補助金が出されることもあるが、大部分の場合には、何の財政援助もなく、すべてボランティアグループが自力で資金を調達する形で行われている。

前者の例として、前述のノッティンガム（人口27万人余）を、後者の例としてイーストサセックス県（ロンドン南部　人口72万人余）をみてみたい。

ノッティンガムの場合、1991年度は、姉妹交流促進の目的で11,000ポンド（約260万円）の補助金を計上している。これは、主に姉妹都市を訪問する際の交通費の補助（一人25ポンド—約6,000円）と、姉妹都市からの来客を迎えた場合の補助（一人15ポンド—約3,600円）に充てられる。

また、このほか姉妹提携に関する市の公的な交流を促進するために、7,400ポンド（約180万円）の予算を計上している。公的な交流についての市民の関心は高く、中には遊山旅行（Junketing）とみる人もいる。このため、この予算の使途には特に留意し、過度に支出しないようにするとともに、予算にゆとりが出たときには、姉妹交流以外の公的な訪問に充てているとのことであった。

一方、イーストサセックス県は、ドイツとフランスの2か所と姉妹提携しているが、姉妹提携に関する予算はまったく計上していない。基本的には、ボランティアグループがそれぞれ自主的に資金を集めしており、地方団体としてどうしても必要なときは、既定予算のやりくりでまかなっているという。

それでは、ボランティアグループはどのように資金集めを行っているのであろうか。ヨーロッパ大陸諸国との交流は、地理的に近いこともあり、交通費は比較的少なくすむ。また、宿泊はホームステイが中心であることなど、費用負担はあまり大きくない。それにしても、必要な資金をどのように確保するかは、ボランティアグループにとって頭の痛い問題である。

たとえば、国際地方自治協会は、資金集めの手段として、ディスコの開催、50対50セル（メンバーが、各自品物を持ち寄り、売り上げた価格の50%を寄付する）による収入、さらには靴磨き、ゲーム大会の主催による入場料など、さまざまなアイディアをあげている。また、音楽関係のグループはコンサートを、スポーツ団体は対抗試合を開催するなど、各グループごとに、それぞれ工夫をこらしている。

資金の確保に関して、EC地域で注目されるのは、ヨーロッパ姉妹交流基金（European Twinning Fund）の存在である。

その目的は、ヨーロッパ統合に向けて、EC12か国の市民や地方議会議員の関心を高めることである。基金はヨーロッパ議会の要望に応えて創設され、この3年間で300万エキュ（ECU 約4.9億円）が姉妹交流促進のために支出された。EC本部への申請手続などは、各国毎に姉妹提携にかんする全国組織（英国の場合は、前述の国際地方自治協会）が行っている。

第五章 姉妹提携支援の仕組み

英国では交流活動が極めて活発であるだけに、こうした活動を支援し、活発化するための制度、仕組みも様々なものがある。ここでは、各種割引き制度の導入、表彰制度、姉妹提携に関するセミナーの開催の三つを紹介したい。

1 旅行費用と保険の割引き

(1) 鉄道

英國国鉄は、ロンドンや英国内の国鉄駅から、ヨーロッパ大陸の都市を訪問する場合、団体料金について15%から45%までの特別割引きを行っている。またフランス国鉄も、英國からの団体旅行客に特別割引きを行っている。

(2) フェリー

姉妹交流促進のため、フェリーを利用してドーバー海峡を渡る人達には、ほとんどのフェリー会社が、通常の団体料金より9~10%特別割り引きした料金を提示しており、その人気は高い。

(3) 飛行機

ある航空会社は、姉妹交流のため12人以上のグループで旅行をする場合、一人分の運賃を無料にするサービスを行っている。

(4) 旅行保険

提携先を訪問する場合、事故や病気、盗難など思わぬトラブルが発生することがある。そうした場合に備えての保険の加入について、保険料を通常の場合より割り引くものである。たとえば、16才以上の場合で5日以上の訪問であれば、通常の保険料は6.85ポンドであるが、25人以上で50人未満のグループであれば、10%の割引きが受けられる。

2 姉妹都市優秀賞の制定

これは、国際地方自治協会が国際郵便公社（Royal Mail International）をスポンサーとして、1989年から始めたものである。その年、世界の各都市と行われた交流活動のうち、とくに優れた活動を行なった団体を「市」、「町」、「村」、「新規提携団体」、「世界の協調に最も貢献した団体」の5つのカテゴリー別に選定するものである。また、全体をつうじての最優秀賞として、毎年一つの地方団体を選んでおり、1990年にはウェールズのカーディフが、1991年にはスコットランドのバースが選ばれた。賞金として、最優秀賞には5,500ポンド（約130万円）が、その他には500ポンド（約12万円）が、それぞれ贈られている。

また、EC12か国を対象にしたEC議会賞がある。これは、ヨーロッパ統一にむけて特に貢献の大きい交流活動を行った地方団体を選定するもので、ヨーロッパ賞（受賞団体1）、名誉賞（同10）、名誉の旗賞（同16）、ヨーロッパベスト外交官賞（同35）の4種類からなる。1991年ヨーロッパ賞は、トルコのブルサ（Bursa）が受賞した。

3 姉妹提携にかかる情報提供、セミナーの開催

英国では、前述のように、ボランティアを中心とする姉妹交流協会が活動の主体となっているところが多い。このため、メンバーの多くは、こうした活動についての知識、経験が十分でないものが少なくないことから、国際地方自治協会や各地方団体が、必要な情報を提供したり、専門的なアドバイスを行ったりしている。

また、姉妹交流活動がかかえる問題や今後の課題について情報交換を行い、交流活動を一層促進するための様々な会議、セミナーが開かれている。ここでは参考までに、1991年11月18日、バースで開催された「第四回姉妹都市交流一日セミナー」を取り上げてみる。

セミナーは、国際地方自治協会が主催したものであるが、会場の確保を始めとする準備に当たっては、バース市役所の全面的な協力を得た。参加者の大部分は、当日の朝、現地入りしたが、スコットランドなど遠隔地からの参加者は、前日から来る必要があった。おもな参加者は、各県、ディストリクト、姉妹交流協会の代表130人余であった。

セミナーは、バース市長の歓迎挨拶で始まり、ついで、姉妹交流活動についての全体報告、経済交流の実践報告と続いた。その後、「財政問題」「姉妹提携の締結と具体的な活動」「地方団体と姉妹交流協会の関係」などの分科会に分かれ、意見交換、質疑を行った。そして、最後にもう一度、全体会議で報告、質疑を行ったあと解散した。

会場での議論は、参加者がいずれも、姉妹交流活動の第一線に立っているだけに、真剣そのものであった。また、参加者が、会議の開始前や休憩時間を利用して、熱心に議論したり、意見交換をはかっていたのも印象的だった。

このほか、最近の例で規模の大きなものとしては、「第四回ヨーロッパ姉妹都市会議」（1991年10月 スイスのローザンヌで開催、英国からの30人を始め 800人以上が出席）、世界的規模の「姉妹都市世界フォーラム」（1992年3月 ニュージーランドのクライストチャーチで開催）などがある。

おわりに

英国における姉妹都市交流は70年以上の歴史を持ち、行政の財政的支援が少ないにもかかわらず、以上見てきたように幅広い分野で活発な交流が行われている。英國の都市が、ヨーロッパ諸国の都市を中心とする各都市との姉妹交流に積極的である理由は諸々考えられるが、相互の地理的・歴史的つながりが深いこと、年齢・職業を問わず多くの人が参加していること、の2点によるところが大きいと思われる。

地理的・歴史的な相互関連が深いことは、交流活動にかかる経済的負担を軽くするだけでなく、参加する人々にとっての精神的負担をも軽くし、各種の交流活動を容易にする。また、行政主導ではなく多様な人々の参加で進められることによって、文化・スポーツ交流のほか技術交流や産業振興のための交流など、それぞれが求めるものを得られるような活動内容が可能になる。交流活動がボランティアの手で行われれば、経済的負担は一層軽減される。実際、英国内での密度の濃い交流活動は、ほとんどボランティアによって支えられているといつても過言ではない。

実利的交流のみを重視することは決して望ましくないが、幅広い分野の人材とノウハウを相互に役立て合うことによって、市民レベルからのよりよい地域づくりを目指すことは、今後ますます重要になっていくと思われる。

日本の姉妹都市交流の歴史もすでに30年余を数えており、わが国でも全国各地で国際交流を目的とした様々なボランティアグループの活躍が見られるようになっている。国際社会における日本の立場が大きくなるにつれて、こうした交流の意義はますます深いものになっている。交流活動を一層実りあるものにするために、英國の姉妹交流の長い経験・蓄積から学ぶものも少なくない。

なお、この報告書は当事務所次長の柳田昇二が中心になってとりまとめたものである。

「CLAIR REPORT」既刊分のご案内

NO	タ イ ル	発刊日
第49号	英国における姉妹都市提携と地方団体	1992/ 6/10
第48号	米国・サンシティー -老人のユートピア-	1992/ 6/ 5
第47号	英国の地方団体の機能と広域行政	1992/ 5/25
第46号	「イングランドにおける地方団体の内部運営」協議書	1992/ 4/30
第45号	フランスの地方自治体の国際交流 -その理念と現状-	1992/ 3/30
第44号	「イングランドにおける地方団体の構造」協議書	1992/ 3/30
第43号	米国連邦政府1993年度予算案について	1992/ 3/30
第42号	フランスの広域行政 -その制度、実態及び新法による改革-	1992/ 3/13
第41号	フランスの下水道 -第1部 制度的枠組みと改革の動向-	1992/ 3/ 6
第40号	英国の監査制度	1992/ 1/31
第39号	ニューヨーク市財政制度と財政危機 -1992年度ニューヨーク市予算-	1991/11/13
第38号	ニューヨーク市財政制度と財政危機 -1991年度ニューヨーク市財政危機-	1991/11/13
第37号	ニューヨーク市財政制度と財政危機 -ニューヨーク市財政制度-	1991/11/13
第36号	英国における社会福祉	1991/10/17
第35号	英国における教育	1991/10/17
第34号	米国におけるべき地医療施策	1991/ 9/20